国分高井遺跡発掘調査報告

３・４・９西街道線改良工事関連埋蔵文化財
調査報告書

１９８１・３

石川県立埋蔵文化財センター

国分高井遺跡発掘調査報告

３・４・９西街道線改良工事関連埋蔵文化財
調査報告書

１９８１・３

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は石川県七尾市国分に所在する国分高井遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターが担当し、石川県土木部（七尾土木事務所）が費用を負担した。

3．出土遺物の整理（洗浄～トレース）は、石川県埋蔵文化財協会（任意団体）に委託して実施した。

4．発掘調査にあたっては、加富栄吉・津田耕吉氏（石川考古学研究会員）の協力を得た。

5．本書の作成にあたっては調査担当者（主事谷内尾晋司・中島俊一・浜野伸雄）の協議により中島があたり、当センター所長はじめ職員各氏の助言を得て実施した。

目　　次

Ⅰ．位置と環境……1

Ⅱ．発見と調査に至る経緯……2

Ⅲ．調査区と層序の概要……3

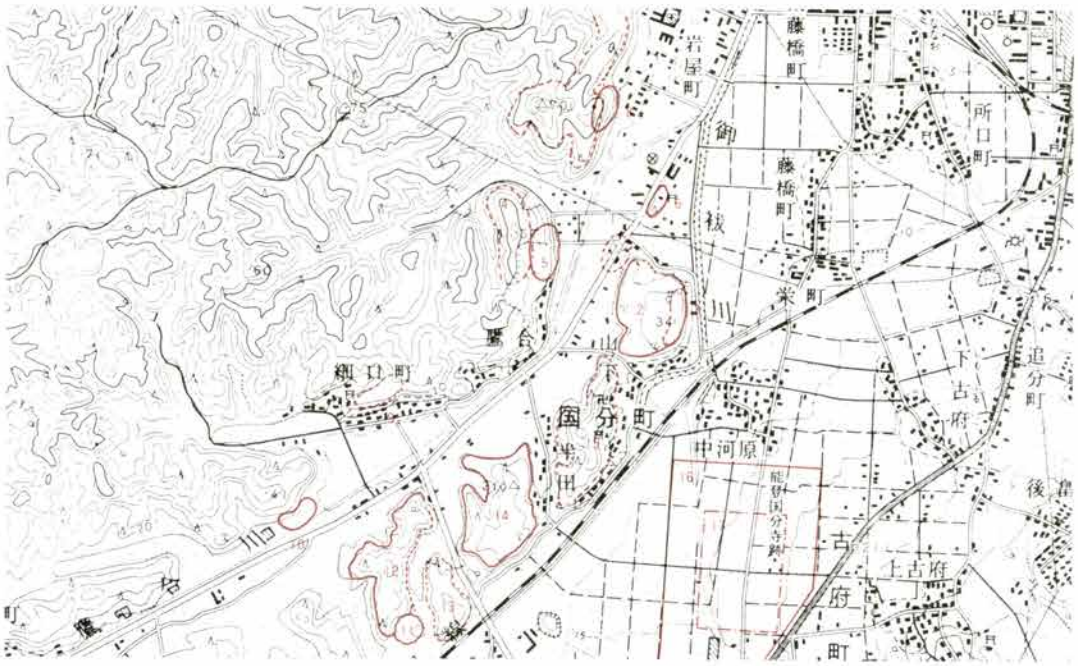
Ⅳ．遺構と遺物……4

Ⅴ．まとめにかえて……16

Ⅰ　位置と環境

国分高井遺跡は、石川県七尾市国分町の通称〝シモイチバン〟（下一番）という標高約5.2mの沖積地の一部～背後の、ウえ部３番地他の丘陵裾部（徳田丘陵）に所在する。

遺跡地は、邑知地溝帯の北側断層崖（丘陵）の東端地帯にあたる、鳥屋町二十九（ひずめ）から七尾市国分町にかけて、同断層崖に併走する徳田丘陵（残丘）とに挟まれた狭長な谷平地に面するも、七尾側開口部にほど近い位置にある。隣接する遺跡では、当遺跡の背後丘陵上の標高約30m上に国分尼塚遺跡②・同尼塚古墳群③、谷平地部を挟んで前面の標高約60mの丘陵上には高井古墳群④と同中腹緩斜面部で国分高井山遺跡⑤が所在している他に、これら延辺部丘陵上には主に弥生時代中期後半頃から古墳時代中期頃にかかる数多い、方形周溝墓等を含む墳基・古墳・集落遺跡が認められている。しかし、暴れ川といわれる鷹合（たかい）川（二級河川）の貫流する谷平地部における遺跡のあり方については不明な現況といえるが、初期水稲農耕の着手から経営の拡大化にとっては、入組んだ小谷あいを多く抱えて比較的容易な自然的条件が備わった地域とみられる。



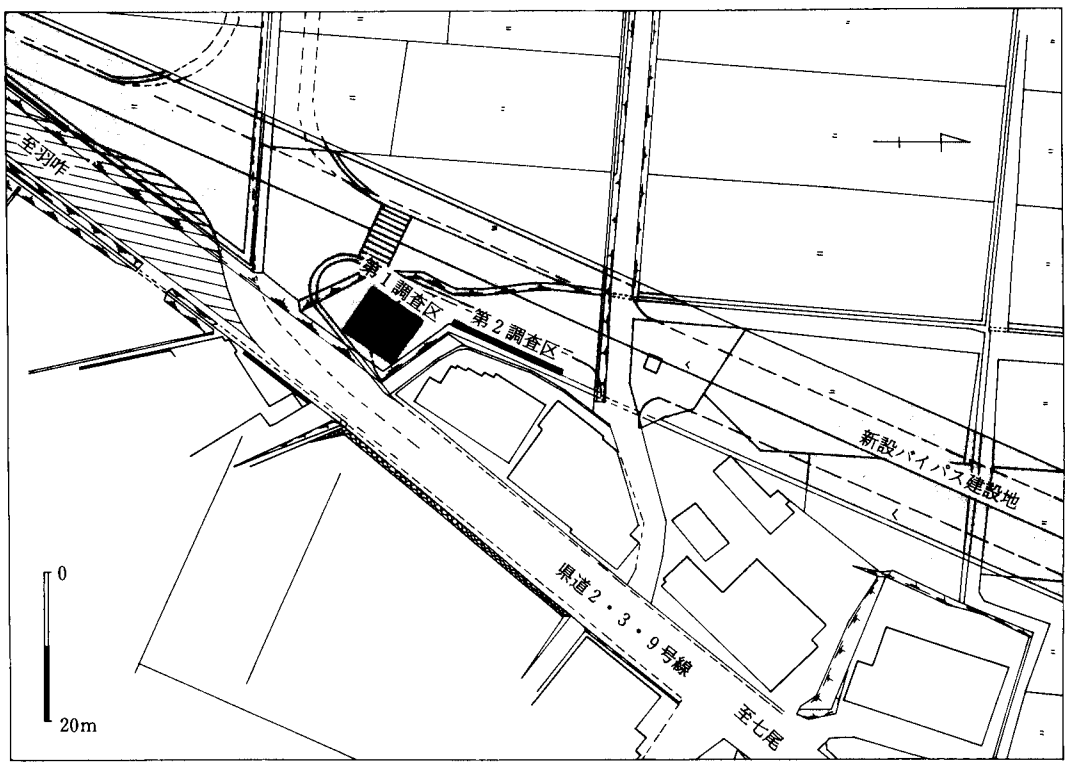
第１図　周辺の遺跡　（国土地理院 1/25,000 図，石川県遺跡地図より転載）

１．国分高井遺跡　２．国分尼塚遺跡（弥生後期）　３．尼塚古墳群（古墳前期）　４．高井山古墳群（古墳中期）　５．高井山遺跡（弥生末期）　６．国分久志伊羅山遺跡（弥生中期）　７．岩屋山古墳群（古墳前期）　８．岩屋遺跡（古墳後期）　９．細口古墳群（古墳中期）　10．細口遺跡（古墳前期）　11．八幡搭地面遺跡（古墳時代）　12．細口源田山遺跡（弥生中期・中世）　13．八幡神社古墳群（古墳前期）　14．国分山遺跡（弥生～古墳）　15．火司神社古墳群（古墳前期）　16．国分廃寺付属建物群跡（奈良・平安）　17．国分廃寺（能登国分寺跡　奈良・平安）

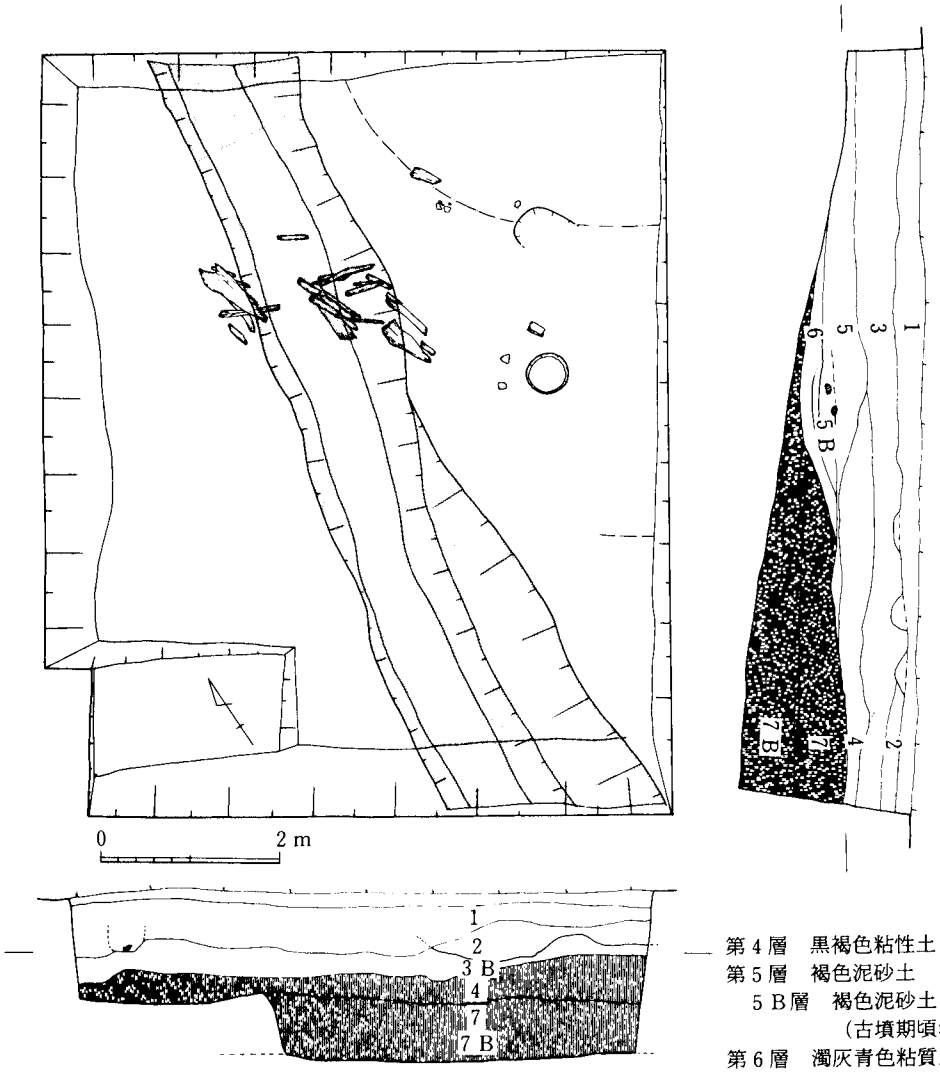
II　発見と調査に至る経緯

昭和54年10月、主要地方道七尾―羽咋線のバイパス（３・４・９西街道線）工事が、歩道の一部を残して掘削換土が完了していた。当時、七尾市域西部丘陵の古墳群を踏査しておられた加富栄吉氏・津田耕吉氏（石川考古学研究会員）らによって、バイパス隣地の当該工事掘削土とみられる排土中より土師器・須恵器片の散在を発見され、問い合せがあった。急拠、県埋文センター・七尾土木事務所で現地状況を確認した結果、未周知遺跡であった当該遺跡中の遺物であることが判明することとなり、双方協議のうえ昭和55年度当初に発掘調査を実施するものとなった。

なお、当該遺物はその排土の状況から、在来線と新設バイパスとの結合地点にあたる丘陵裾端部～平地水田部への変換部にあたった位置（範囲）の掘削土であったとほぼ想定され、また、当該地は表土層下に厚い草炭層の推積があって、これを取り除いて固いベース面より換土を行う設計であったので既工区域については発掘調査の対象から除外し、未着手の歩道部分を中心とする約200m²の範囲内について昭和55年４月中旬に実施し、同５月初旬に終了した。出土遺物は現在、県埋文センターで保管している。



第２図　調査区位置図



第3図　第1調査区（平面図・立断面図）

第1層　淡茶褐色砂質土
第2層　淡褐色砂質土
第3層　茶褐色泥砂土
3B層　茶褐色泥砂土＋砂の混土（中世期溝）
第4層　黒褐色粘性土
第5層　褐色泥砂土
5B層　褐色泥砂土＋砂の混土（古墳期頃溝）
第6層　濁灰青色粘質土（同上半で木の根？の地下系によるブロック状の黒色）
第7層　草炭層（暗茶褐色少量含む）
7B層　〃（　〃　）
第8層　黄褐色～灰白色砂土

III　調査区と層序の概要

歩道部分として掘削が取り残された位置は、新設バイパスと在来線とのほぼ接合に係る位置にあたる、東～西側に傾斜する丘陵裾末端部の小範囲であり、在来線に接して第1調査区・この北側にトレンチを配して第2調査区とした（第2図参照）。

第1調査区では、表土層除去後は常に湧水と壁面の崩落が伴ない、最終床面（砂層）の検出に至るまではふわふわとした遊離的な地層状態と、ヘドロ化するなかで、比較的遺物が多く出土するにも拘わらず所属層を明確に把握しえずに取り上げた遺物がほとんどである。

ただ、崩落が少規模であったために層序記録をすることができた東壁と南壁とにより、概括的に上部層より列記すると、淡茶褐色粘砂土（第１層）・淡褐色砂質土（第２層）・茶褐色泥砂土（第３層）で中世陶器など出土し、南北方向に走る溝跡を検出した。この下が黒褐色土（第４層）で、次の褐色土(第５層)、濁灰青色強粘質土(第６層)となり、出土土器のほとんどがこの第４層～第５層（第５層が主体となる）にかけてのものとみなしうる。第６層の下部層では、傾斜面に沿って最厚部分では約１mのボカボカとしたタイ肥状草炭層（第７層）の推積があり、以下は黄褐色粘砂土～灰白色砂の固いベース面となり、ここより縄文式土器片を採取した（第３図参照)。

第２調査区は発掘の結果平地沖積部に該当し、西側過半がバイパス工事による掘削が及んでいると伴に、東側では旧来の宅地化のためか造成盛土（土器１片出土）が行なわれたと考えられる厚い攪乱土が存在するものの、包含層・遺構ともに発見されなかった。

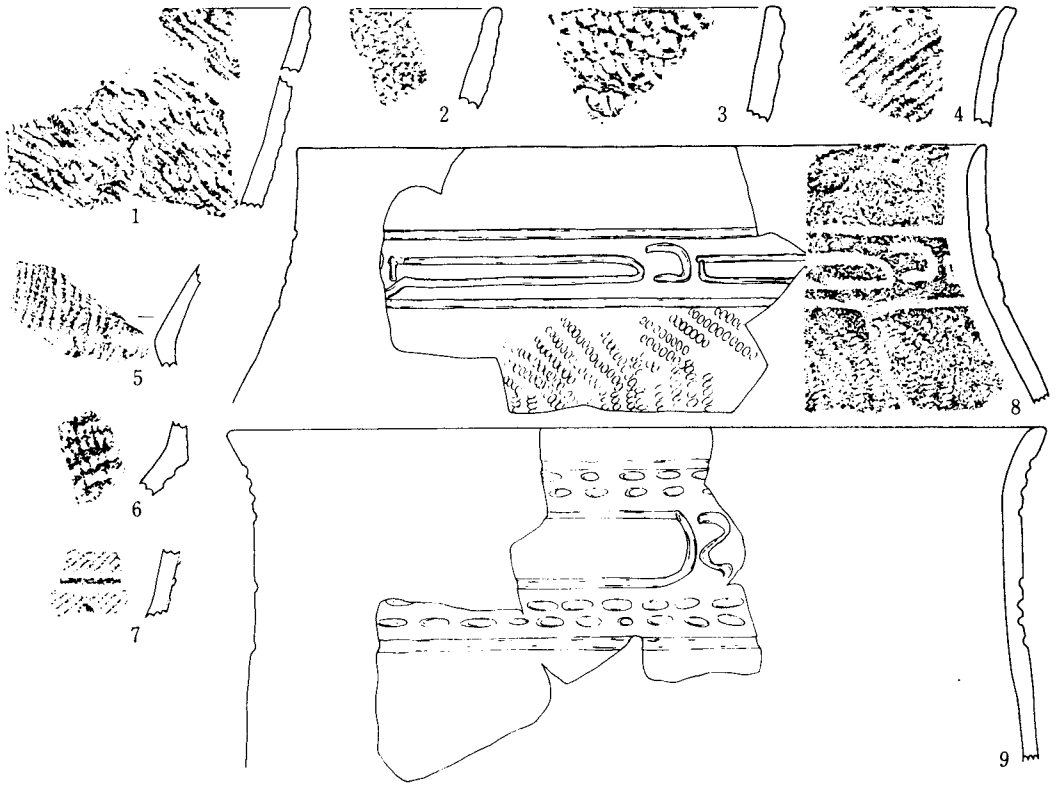
Ⅳ　遺構と遺物

当遺跡で確認することができた遺構には、幅約1.3m・深さ約0.3mの北→南に向かう可能性の強い（総体的自然地形からは逆流方向となる）中世の溝跡１条と、円形小ピット、弥生末葉頃から古墳時代後期内に納まる長方形の浅皿状小土坑の痕跡を認めた他には何も発見していない。中世期の遺物を除くその他の遺物の出土範囲は、極めて調査区の北西に偏在しており、第５層とした褐色砂質土層のあり方に対応している。また、調査途中の段階では草炭層に覆流した湧水が上覆する強粘性土とを遊離させ、ふわふわとしたゴム毬状ともなって確認しえなかったが、土層断面図（５Ｂ層）と自然木（腐蝕が著しく加工痕は全く不明なために自然木とした）の点在状況で照応される、東→西への流跡（溝か）があったとみなされる（第３図)。

次に出土遺物について説明を行っていきたいが、例えば、最下部より出土した土器群を縄文式（期）土器・上層部溝跡を中心として出土した遺物群を中世陶器（期の遺物）などとして区分して掲げることは可能だが、中層部にあたる溝状跡を含む第５層を中心として出土した土器群には、伴出関係を不明として大略弥生末葉頃～最新では奈良末葉ないし平安初頭頃かと思われる須恵器（１点）まで含まれると考えるが、これらの一群中には能登式製塩土器・これに調整や色調面でかなり似通う埦タイプないし小鉢型土器などもかなり含まれており、上記の縄文・中世など時代的区分で掲げられるのに反し、時代別などの整然とした区別をなしえず器種的・機能的などいずれも極めて不整合のままとなってしまったので、便宜的に第１群土器（下部層出土の縄文式土器）・第２群土器（中位置出土の土器・須恵器など）・第３群土器（上部溝跡等出土の中世陶など）として大別し、それぞれ若干の説明を加えるものとしたい。

第１群土器（第４図１～９）

第１調査区の自然傾斜地形に伴なう最も深くなる西側の、草炭層最下部～砂層面で点在的に発見した縄文式土器群で、口縁部を留めるものは６点である。１・２はそれぞれ特異な多節縄文を器表面に転がし、２の内面には条痕状の調整が行なわれている。３は、縄文のループ部分を回転



第4図　第1群土器実測図（$\frac{1}{3}$）

して飾っているものでR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$を使う5段があって、胎中には繊維を含む。4は口唇部を面取り状として外反気味に立上る口縁であり、器表面はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$かとみられる。7は縄文地に細い粘土紐の貼付（ソーメン貼か）があり、上下欠損部でも平行する貼付紐があったと思われる。8・9は口辺部に、平行する2条の沈線によって幅広い区画帯を設け、この区画帯内にコの字状・ジグザグ状の小沈線文を挟ます長方形状の区画線施文をめぐらすもので、なお9では押引きによる雨滴状列点文の加飾がある。いずれも体部では縄文を施こす。

伴出関係は全く不明であるが、特徴的な施文のみられる（3）・（7）・（8・9）によって代表される、ほぼ3期からなる土器群と推測される。

関東関山式に類似するループ文をもつ土器片では、甲・小寺遺跡[1]で確認されており、3の胎中には繊維が含まれることなどから前期初頭頃に位置づけされている佐波式[2]段階と、ソーメン貼りを施こす7の、福浦上層式か朝日下層式（前期後半）[3]頃とみられる段階と、8・9の前田式[4]に相当する中期末葉～後期初頭にあたる段階の土器群と思われる。

第2群土器（第5図～第8図）

第2群土器とした土器群は、時期的に大きくは2分できるものと考えられるが、上述のとおり湧水・軟弱面・壁体の崩落・北西部での中世期溝との一部交錯などの諸条件も伴なって、個別的・相互的には位置関係を明確になし得ず誤認したものを含む図版割と思われるので、後考に委ねる

部分の多いことを予めお断わりして、一連番号と略観察表（第２群土器観察表）を付して概略のみの報告としておきたい。

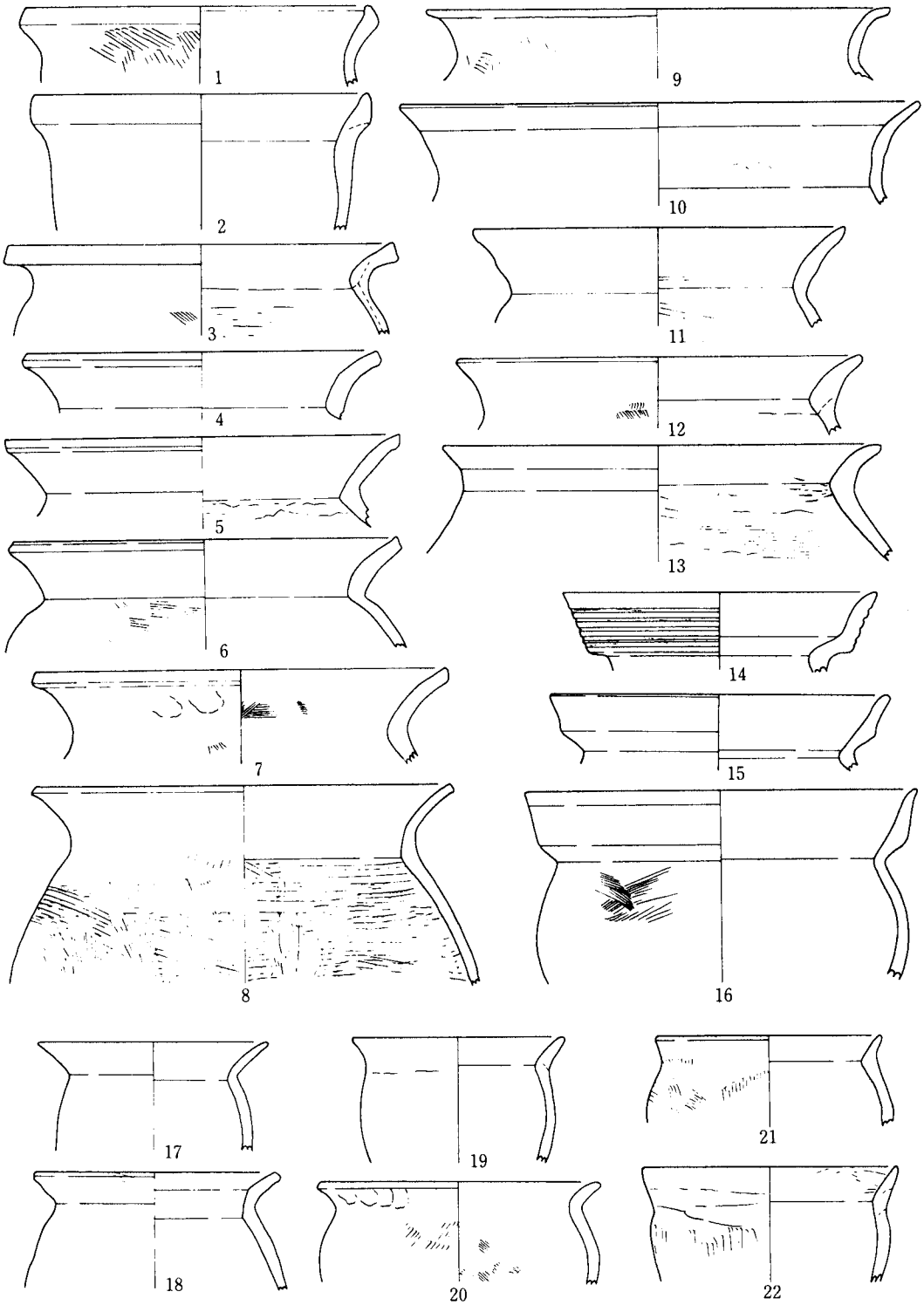
第５図～第６図（１～49）の土器は、畿内第Ｖ様式の終末段階頃に比定された羽咋市柳田のうわの遺跡[5]溝Ａ出土土器群にやや後出的な土器から、同溝Ａより若干の年代差をもって後出するとみられている同２号住居跡出土土器に類するものを一部含み、これに後出的なくの字状口縁甕なども認められ、少なくとも４～５小期（型式か）の土器を包括しているものと考えられる。

第７図（50～56）は須恵器で、（57～67）は能登式製塩土器である。50は宝珠のつまみが付く坏蓋で、51・52とはセットとなるかは不明であるが、法皇山横穴古墳群出土の蓋・坏の分類[6]に頼れば50がほぼＢＩ$_a$～ＢＩ$_b$類，51・52がＡIV類に近いもので、法皇山第IV型式（７世紀前半）に位置付けられ、53～55の短頸壺・平瓶においても大阪陶邑窯でのTK217か降ってもTK46段階（７世紀前半）[7]に包括される。56は低い箱形の高台付坏で、奈良時代後半以降のものかと思われる。

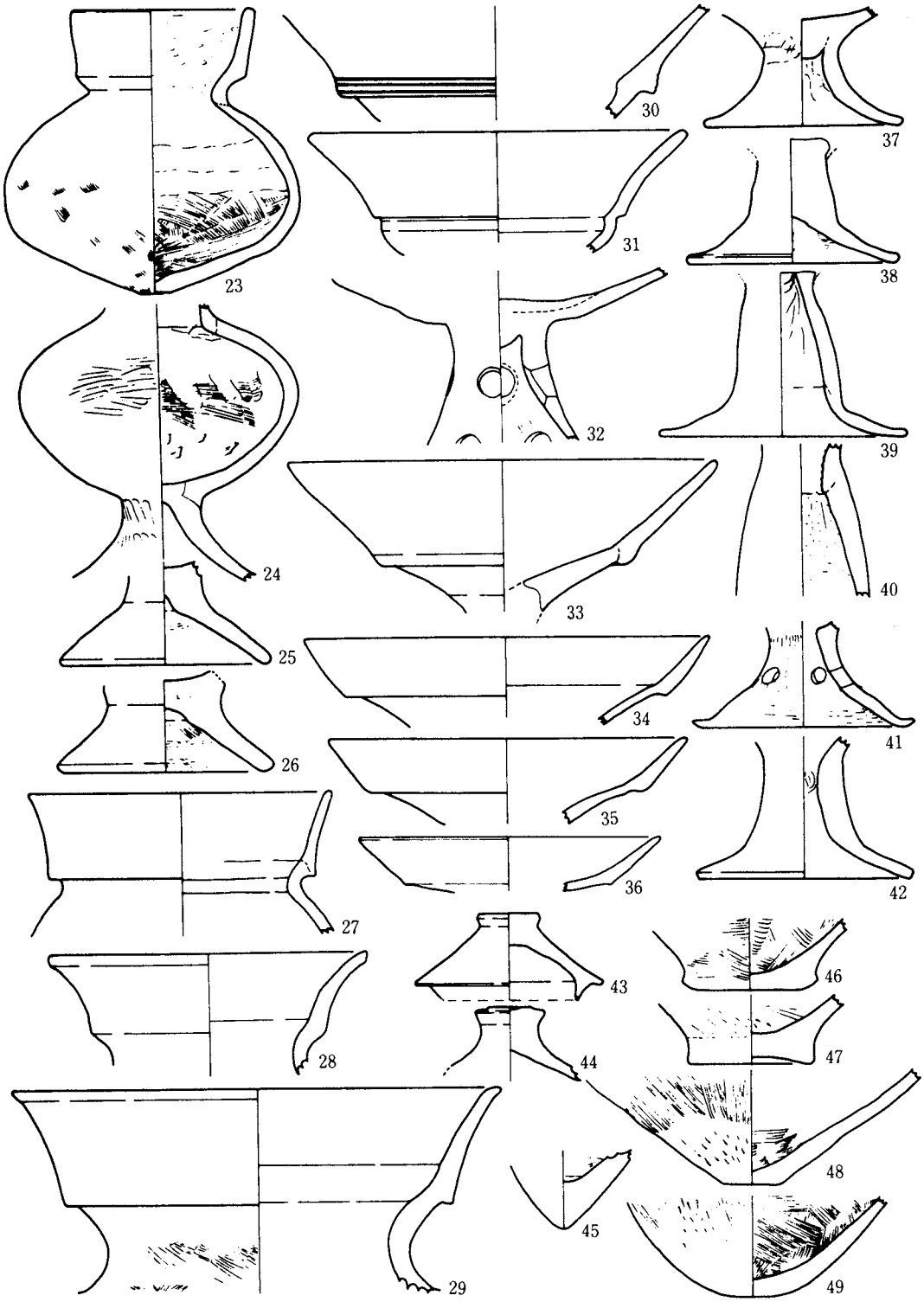
製塩土器の（57～67）は、土器製塩[8]遺跡で一般的に採取される赤く焼けひびれた製塩土器とは異なり、いずれも通常の土師器と同様の色調である。また、煤などの付着も認められないので二次的加熱を受けていないものと考えられる。59・60は角状形尖底部を欠くが、原形をよく留める好品である。口唇部は直線的なものから内傾・内湾させるものの他は、特に形状的な特徴は見い出せない。倒盃形台付タイプの57・58は、小型に属すかと思われるが脚端部のナデによって面をもつ安定的な台部としている。前者の角状形尖底タイプは（50～55）の須恵器群に・後者の倒盃形タイプは（１～49）の土器群中にそれぞれ対応してくるかもしれない。

第８図（68～102）の土器は、埦形ないし小型の鉢形タイプの土器を一括して掲載したが、（68～97）については成形・調整面でかな似通うものであり、概して粘土紐の巻き上げ・指押さえによる凹凸痕を留めており、内面の調整では指ナデを行うものと荒いハケ状具ないし櫛歯状具による粗雑な作りといえる。口径約６～10cm前後・器高約4～5cm前後で、円底タイプ２種・平底タイプ２種とがあるようだが、年代的あるいは用途・機能面で同一のものとして一括できるかどうかも全く不明である。76・83などの極く小形の手捏タイプの土器は、一般的に５世紀段階頃より出現する祭祀性の強い土器とみられるものに類似するが、（68～97）の一群からの分離はし難いものがある。還って、角状尖底付製塩土器の調整（巻上げ・ハケ・ナデ・一部削り痕）・色調・胎質面で相通じるものがあり、これらとの関連性も匂わせる。ただ、これら粗製小型の埦形ないし鉢形土器（の一部）については“塩„に係わる（焼塩など？）容器などを想定して検討する必要もあるが、現状において、製塩遺跡中では類品の存否の確認が得られておらず、集落遺跡では６Ｃ後半の鳳至郡穴水町曽福遺跡第１号住居（穴水町教委刊1980）中で１点存在するようであるが、製塩関係土器として証拠しうる資料は得られていない。また、当遺跡では出土場所・土器様相では祭祀的側面も考えうるところであり、いずれにせよ今後の検証に委ねたい。

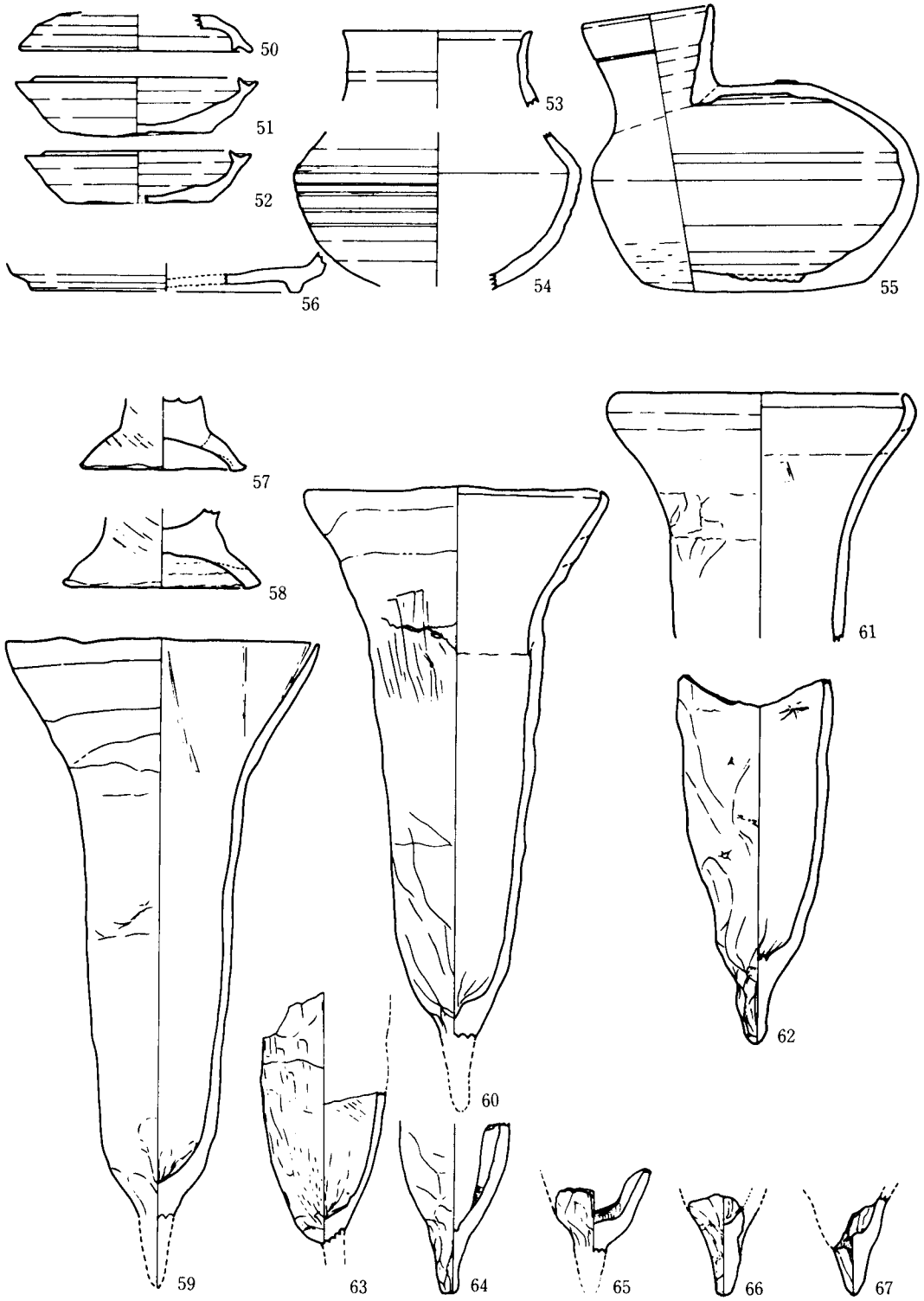
（98～102）は埦ないし盌形土器で、上記粗製タイプの土器と異なり比較的大振りで器肉も薄く機能的側面での一線を画すものと思われる。99は外面にヘラ状具磨き痕をかすかに留めて口縁部がやや内傾する盌形の形態を留めており、101・102と共に６世紀後半頃～７世紀前半[9]に位置付けが可能かと思われ、第７図（50～55）の須恵器群に伴なったものと推測しておきたい。



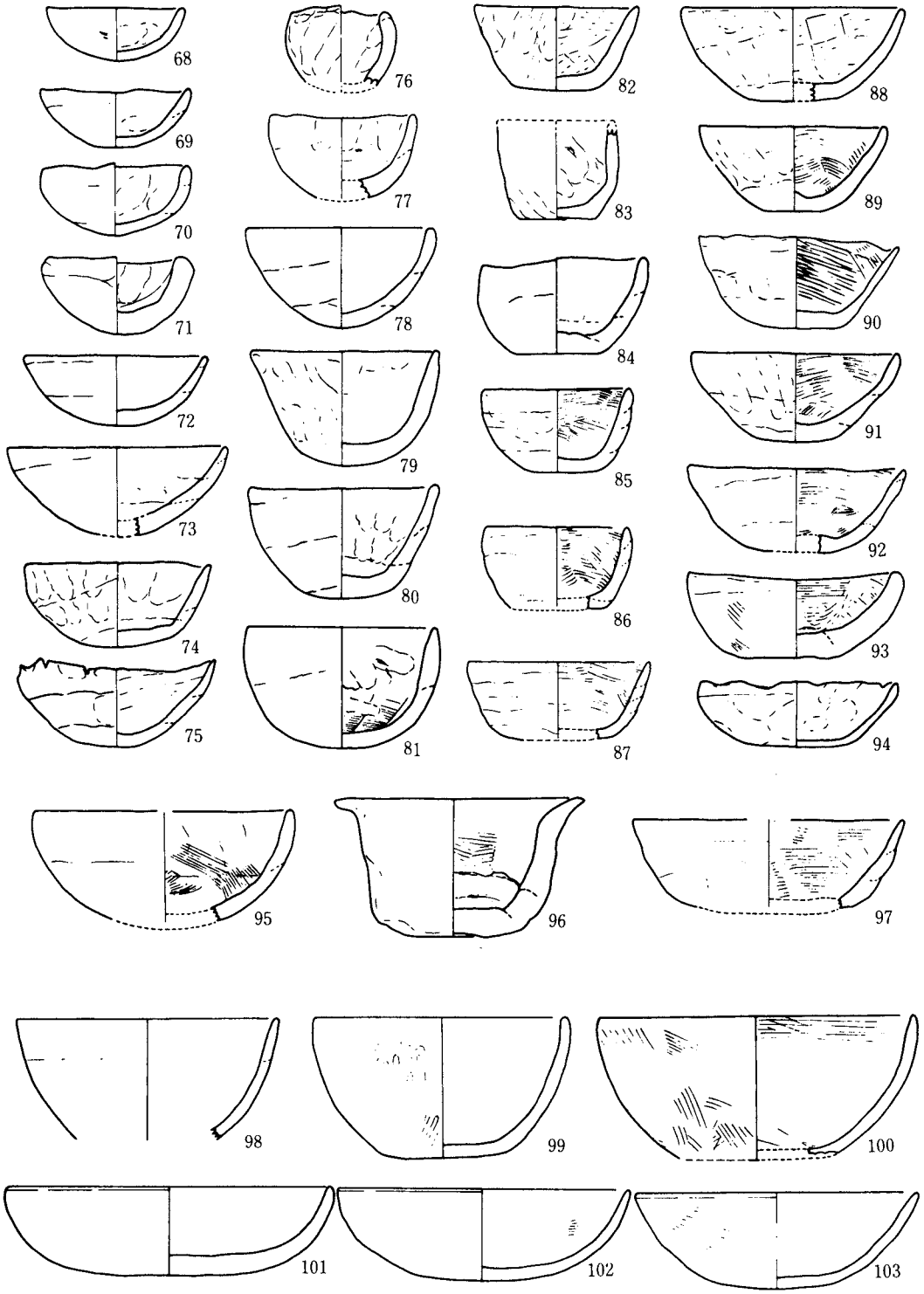
第５図　第２群土器実測図１（$\frac{1}{3}$）



第6図　第2群土器実測図2（$\frac{1}{3}$）



第7図　第2群土器実測図3（$\frac{1}{3}$）



第8図　第2群土器実測図4（$\frac{1}{3}$）

第2群土器　観　察　表

器　種	番号	調整手法△ 口頸部	調整手法△ 体底部	胎土・色調・焼成など	その他
甕	1	口唇部と内面はナデ調整で外面は口縁即下よりハケ状具	内面はヨコナデ・外面は斜方向のハケ状具調整	細砂を小量含む・淡黄褐色・焼成良好	口　径　15.8cm
〃	2	内外面ともナデ調整	器面は摩耗して不明であるがヨコナデ？	粗砂粒を多量に含む・淡黄茶褐色・良	口　径　15.2cm
〃	3	口唇部～頸部にかけて内外面ともヨコナデ調整	内面は右～左への削り・外面はハケ状具調整	微砂粒少量含む・灰黄茶褐色・良	口　径　17.5cm
〃	4	内外面ともヨコナデ調整	不明（ハケ状具？）	粗砂粒多く目立つ・淡黄茶褐色・良	口　径　16.0cm
〃	5	〃	内面はハケ状具・外面は不明である	粗砂粒多量に含む・褐色・普通	口　径　18.0cm
〃	6	〃	内面はヨコナデか・外面はハケ状具調整	粗砂粒多量に含む・淡褐色・普通	口　径　17.5cm
〃	7	口唇端部はナデ調整で、以下の口頸部は内外面ともハケ状具の後にナデを行っている	ハケ状具後にナデ調整を加える（一部にハケ状痕残る）	粗砂粒多量に含む。灰黄茶褐色・普通	口　径　18.6cm
〃	8	内外面ともヨコナデ調整	内外面とも荒いハケ状具で、外面はタタキ様（擬タタキ）	砂粒少量含む・暗茶褐色・良	口　径　19.0cm 外面にススス
〃	9	口縁端部内外面と頸部内面はナデ・頸部外面にハケ状具	不明	細砂粒を多く含む・淡橙褐色・普通	口　径　21.0cm
〃	10	内外面ともナデ調整であるが、頸基部内面に指頭圧痕残	不明	粗砂粒少量含む・灰黄茶褐色・普通	口　径　23.5cm 外面にススス
〃	11	外面はナデ・内面の口縁下部ではハケ状具後のナデ調整が認められる	内面はハケ状具調整か・外面はナデ（？）	細砂粒目立つ・茶褐色・普通	口　径　16.8cm 外面ススか
〃	12	口縁部内外面ともヨコナデ・頸部外面にハケ状具あり	外面はハケ状具か	粗砂粒多く含む・淡黄茶褐色・普通	口　径　18.4cm 外面にススス
〃	13	内外面ともヨコナデ調整	内面頸部下で削りが認められるが、以下はハケ状具か・外面はススの付着で不明	粗砂粒多量に含む・灰黄茶褐色・普通	口　径　19.8cm
〃	14	〃	不明	粗砂粒若干含む・灰黄茶褐色・普通	口　径　15.2cm
〃	15	〃	外面はハケ状具調整・内面はナデ（？）	粗砂粒少量含む・淡茶褐色・普通	口　径　17.8cm
〃	16	口縁部内外面ともヨコナデ調整で、外面に5条の擬凹線	不明	粗砂粒を多く含む・灰黄茶褐色・良	口　径　14.2cm
小形甕	17	表面摩耗して不明	内外面ともナデか	粗砂粒を多く含む・橙褐色・普通	口　径　10.5cm
〃	18	内外面ともヨコナデ調整（ハケ状具調整後？）	〃	粗砂粒多量に含む・灰茶褐色・普通	口　径　10.8cm 胴部にスス
〃	19	内外面ともナデ調整	〃	粗砂粒多量に含む・淡橙褐色・普通	口　径　9.6cm
〃	20	内外面ともナデ調整であるが、外面に指頭圧痕が残る	内外面ともハケ状具調整がみられる	粗砂粒少量含む・灰茶褐色・普通	口　径　12.8cm
〃	21	外面はナデ・内面はヨコ方向へのハケ状具調整	内面はナデ・外面はタテ方向へのハケ状具調整	細砂粒少量含む・茶褐色・普通	口　径　10.2cm
〃	22	外面はナデ・内面にハケ状具痕が認められる	内面はナデ・外面にタテ方向へのハケ状具調整	粗砂粒少量含む・濁乳白色・良	口　径　11.4cm
小形壺	23	内外面ともヘラ状具による磨き調整	外面はハケ状具後に磨き・内面は胴部中位以下でハケ・以上でナデ調整	細砂粒少量含む・濁乳白色・良	口　径　7.2cm 器　高　13.0cm
〃（台付）	24	頸部内面はナデ調整（一部に赤彩痕が認められる）	外面は、体部～脚台部とも磨き・内面は体部にハケ状具痕と一部にナデ・脚部はナデ	粗砂粒少量含む・黄茶褐色・良	
〃（台部）	25		内外面ともナデ？	微砂粒少量含む・黄茶褐色・普通	端　径　9.4cm
〃（台部）	26		外面はナデ・内面はハケ状痕に一部ナデ	粗砂粒多量に含む・黄茶褐色・普通	端　径　10.0cm
壺	27	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ調整	粗砂粒を多量に含む・黄茶褐色・良	口　径　13.0cm
〃	28	〃（外面に赤彩痕あり）		砂粒少量含む・黄茶褐色・良	口　径　14.8cm

器　種	番号	調　整　手　法　△		胎土・色調・焼成など	その他
		口　頸　部	体　底　部		
壺	29	口縁部内外面と頸部内面はナデ・頸部外面にはハケ状具痕がみられる		砂粒を多量に含む・黄茶褐色・良	口　径　22.6cm
高　坏	30	内外面とも丁寧な磨き調整で、頸基部外面に擬凹線4条	体部の内外面とも磨き調整	砂粒を少量含む・黄茶褐色・良	
〃	31	内外面とも磨きか（内外面とも赤彩あり）	内外面とも磨きか（内外面とも赤彩あり）	粗粒砂やや目立つ・淡橙褐色・良	口　径　17.2cm
〃	32	不詳	外面不詳・内面にハケ状痕残る（穿孔は8孔みられる）	粗粒砂を少量含む・淡橙褐色・普通	
〃	33	表面摩耗して不詳		微砂粒多量に含む・淡橙褐色・良	口　径　20.0cm
器　台	34	内外面とも磨き調整かとも思われるが不詳		粗粒砂目立つ・濁乳白色・良	口　径　18.8cm
〃	35	表面摩耗して不明		砂粒多く含む・淡黄褐色・普通	口　径　16.6cm
〃	36		内外面ともナデ調整	砂粒少量含む・淡橙褐色・普通	端　径　13.8cm
高坏等脚	37		接合部外面と内面上半に指ナデ痕・その他はナデ調整	粗砂粒多量に含む・黒褐～黄茶褐色・良	端　径　8.8cm
〃	38		外面はナデ・内面にハケ状具調整痕を留める	砂粒少量含む・淡茶褐色・良	端　径　9.6cm
〃	39		外面と内面脚受部にナデ・脚上部内面に絞りが残る	砂粒はほとんど含まず・淡橙褐色・良	端　径　11.4cm
〃	40		外面はナデ・内面はヨコ方向への削り	砂粒多量に含む・淡橙褐色・良	
〃	41		外面上半はタテ方向の磨き・その他はナデ調整（5孔）	粗粒砂微量に含む・黄茶褐色・良	端　径　10.2cm
〃	42		内面に絞り目が一部残るが全般的に内外面ともナデ調整	砂粒少量含む黄茶褐色・良	端　径　10.0cm
蓋	43	内外面とも入念なナデ調整	内外面とも入念なナデ調整外面体中央部に赤彩痕あり	砂粒ほとんど含まず・淡橙褐色・良	口　径　6.3cm
〃	44		表面摩耗して不詳であるがナデ調整か	砂粒少量含む・黄茶褐色・普通	
底　部	45		外表面は不明・内面はハケ状具痕が観察される	砂粒を少量含む・灰褐色・良	尖底状となる
〃	46		内外面ともハケ状具調整で外底面はナデ	砂粒少量含む・黄茶褐～黒褐色・普通	底　径　6.2cm
〃	47		内底面は削りで、外側面～外底面にかけてナデ調整	粗砂粒少量含む・黄茶褐色・普通	底　径　5.8cm
〃	48		体下部内面は削り・外面はハケ・底部外面は削りで内面にハケ状具調整	微砂粒少量含む・黒褐色・普通	底　径　2.6cm
〃	49		外面はハケ状具にヘラ削りが加わる・内面はハケ状具	砂粒少量含む・黄茶褐色・普通	丸底
坏蓋（須恵器）	50	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ調整（頂部不明）	微砂少量含む・淡灰色・良	口　径　10cm
坏（〃）	51	〃	内外面ともナデ調整（外底面はヘラ切痕が残る粗ナデ）	〃	口　径　10.4cm
〃	52	〃	〃	〃	口　径　11.2cm
壺（〃）	53	内外面ともナデ調整		微砂少量含む・青灰色・良	口　径　8.8cm
〃	54		内外面ともナデ調整で外面肩部より以下に5条の浅凹線	〃	最大幅　13.3cm
平　瓶	55	内外面ともナデ調整で、I条の凹線あり	外面上半はナデで肩部以下より削り・内面はナデ調整（外頂部に乳頭状貼付文2点）	粗粒砂少量含む・青灰色・良	口　径　5.8cm 器　高　13.3cm 体　幅　14.8cm
坏（台付）	56		底部内外面ともナデ調整（付高台）	砂粒少量含むが見立たず、灰色・良	底　径　不明
（製塩土器）倒盃型	57		内外面ともナデ調整とするが、外面に荒櫛歯状の擦痕残	粗粒砂少量含む・淡茶褐色・並通	底　径　7.6cm
〃	58		〃	〃	底　径　9.0cm

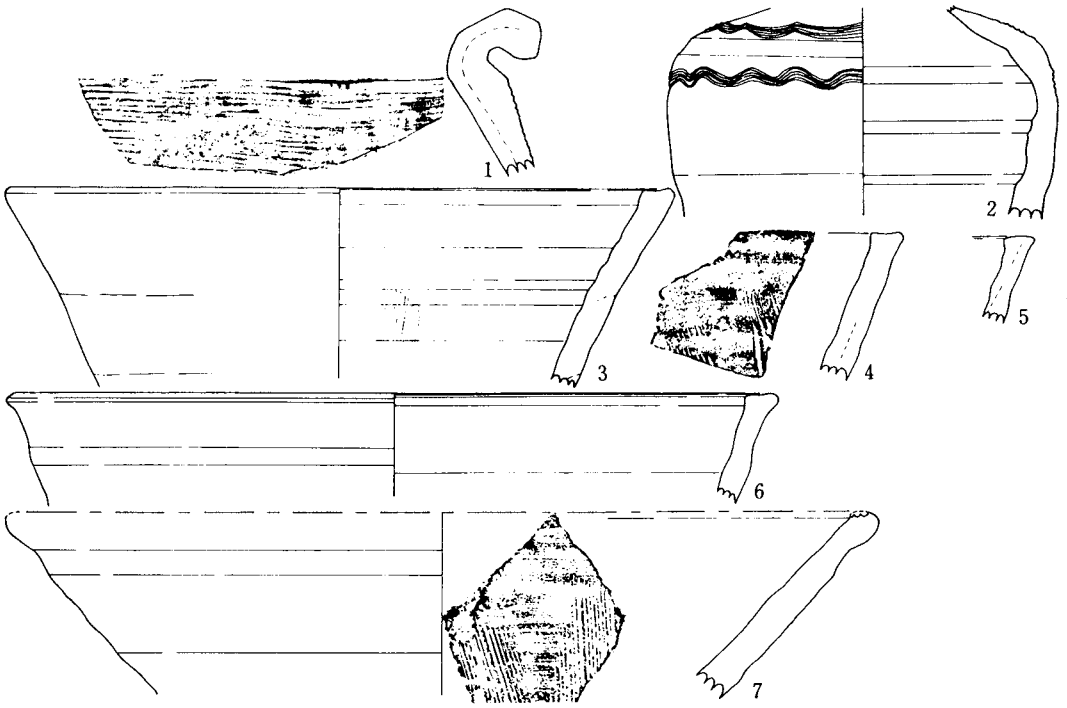
器　種	番号	調整手法△		胎土・色調・焼成など	その他
		口頸部	体底部		
(製塩土器)尖底型	59	内外面ともヨコナデであるが、内面は削り様の板状具によるナデ調整（外面は継ぎ目痕を顕著に留める）	体部内外面ともナデ調整で、体底部内面に絞り目を残す・外面脚部～体底部にかけてナデ上げ調整	砂粒を多量に含む・淡橙褐色・良	口径 13.4cm 現存器高26.8cm
〃	60	内外面ともナデ調整で、頸基部～体上部で一部削り調整（外面は継ぎ目痕顕著）	体部内面は底部で絞り目を残す他はナデ・外面は中位でヨコナデ、以下ではナデ上げ	砂粒かなり目立つ・淡黄茶褐色・良	口径 13.8cm 現存高 25.4cm
〃	61	内外面ともヨコナデ調整（両面とも継ぎ目痕顕著）	体部上半内外面ともヨコナデ調整	細砂～粗粒砂少量含む・橙褐色・良	口径 13.0cm
〃	62		外面は脚部よりナデ上げ・内面は底部に絞り目を残してナデ上げと、一部にヨコナデ	粗粒砂かなり目立つ・淡橙褐色・良	内底～脚端長約4.0cm
〃	63		外面体部は削り・内面は底部に絞り目を残して、以上はハケ状具後のナデ調整か	微砂～粗粒砂目立つ・黄茶褐色～淡橙褐色・普通	器壁厚 約0.4cm
〃	64		外面はナデ上げ・内面は下部で一部削り痕の他はナデ	細砂～粗粒砂少量含む・淡橙褐色・良	内底～脚端長約3.0cm
〃	65～67		外面ナデ・内面絞り目（65は一部ハケ状具痕あり）	〃	〃 2.8～3.3cm
小型土器(鉢？)	68	内外面ともナデ調整？	外面摩耗して不詳であるがハケ状具痕あり・内面は指頭によるナデ押さえ・外底面は削り調整	砂粒多量に含む・淡黄茶褐色・良	口径 6.2cm 器高 2.4cm
〃	69	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ（内面に指頭による押圧痕・外面に継ぎ目痕を残す）	砂粒少量含む・淡橙褐色・良	口径 6.9cm 器高 2.6cm
〃	70	〃	〃	細砂～粗粒砂多量に含む・濁乳白色・良	口径 6.6cm 器高 3.7cm
〃	71	外面はナデ調整で、内面は底面から指ナデ（押さえ）	外面全体的にナデ・内面は指ナデ（押さえ）	粗粒砂やや目立つ・淡橙褐色・良	口径 6.2cm 器高 3.5cm
〃	72	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ調整（外面は粘土紐の継ぎ目痕残る）	砂粒少量含む・淡橙褐色～乳灰色・良	口径 8.2cm 器高 3.2cm
〃	73	内外面ともナデ調整であるが、内面に一部削り痕あり	内外面ともナデ調整（継ぎ目痕残る）	砂粒少量含む・淡茶褐色・普通	口径 10.0cm 器高 4.1cm
〃	74	内外面とも指押さえに一部ナデ（指紋一部にあり）	底部内外面はナデで、その他に指押さえと一部ナデ	粗粒砂多量に含む・淡橙褐色・良	口径 8.5cm 器高 3.9cm
〃	75	内外面とも指押さえ後に指ナデ調整	内外面とも指押さえ後に指ナデ（継ぎ目外面に顕著）	砂粒を多量に混入・淡橙褐色～暗褐色・良	口径 8.8cm 器高 3.8cm
〃	76	外面は指押さえ・内面はナデ調整	外面は指頭によるナデ上げ・内面は押さえ後に一部ナデ	粗粒を含む砂粒多量に混入・淡橙褐色・良	口径 4.5cm 器高 約4cm
〃	77	内外面とも指押さえ後にヨコナデを行う	内外面ともナデ（粗）	粗粒を含む砂粒多量に混入・灰味黄茶・良	口径 6.8cm 器径 4.0cm
〃	78	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ調整（継ぎ目痕外面で顕著）	粗粒砂少量混入・灰黄茶褐色・良	口径 8.4cm 器高 4.5cm
〃	79	内外面とも指押さえ後に軽いナデを施す（口縁端部は花弁状の凹凸残す）	内外面ともに指押さえ後にナデを加え、ほぼナデ消しとなる	粗粒砂多量に混入・淡橙褐色・良	口径 8.5cm 器高 5.2cm
〃	80	内外面ともナデ調整（内面に指押さえ痕）	内外面ともナデ（内面に指押さえ痕・継ぎ目痕内外面ともに顕著）	粗粒砂目立つ・灰黄茶褐色・良	口径 8.3cm 器高 5.0cm
〃	81	内外面ともナデ調整	外面は全般的にナデ・内面は指ナデ痕と底面にハケ状具痕を留める	粗粒砂多量に含む・淡橙褐色・良	口径 8.7cm 器高 5.5cm
〃	82	内外面とも指押さえ後の削り調整（タテ方向）	内外面とも指押さえ後の削り調整（ヨコ方向）	砂粒少量混入・灰味黄茶褐色・良	口径 7.5cm 器高 3.8cm
〃	83	内外面ともナデ調整	内外面とも指押さえ後のナデ調整（下方より上方へ）	粗粒砂を多量混入・淡橙褐色・良	口径 約5.4cm 器高 約4.5cm
〃	84	〃	内外面ともナデ調整で、内底面に指頭押圧痕を留める	粗粒砂やや目立つ・淡橙褐色・良	口径 7.4cm 器高 4.4cm
〃	85	外面はナデ調整（指頭圧痕一部に残る）・内面はハケ状具調整	外面はナデ（指頭圧痕・継ぎ目残る）・内面はハケ状具調整（ハケ状具目深みあり）	粗粒少量含む灰味黄茶褐色・良	口径 6.6cm 器高 3.8cm
〃	86	外面はナデ調整・内面はハケ状具調整	外面はナデ・内面はハケ状具（継ぎ目は外面で顕著に）	砂粒少量含む・灰味黄茶褐色・良	口径 6.5cm 器高 3.8cm

器　種	番号	調　整　手　法　△		胎土・色調・焼成など	その他
		口　頸　部	体　底　部		
小型土器（鉢？）	87	外面はナデ調整・内面はハケ状具調整	外面はナデ・内面はハケ状具（継ぎ目は外面で顕著に）	砂粒少量含む・灰味黄茶褐色・良	口　径　8.3cm 器　高　3.5cm
〃	88	外面はナデ(指頭圧痕あり)・内面は削り調整	外面はナデ・内面は削り調整（外面に継ぎ目痕残る）	粗砂粒多量に混入・灰味黄茶褐色・良	口　径　9.9cm 器　高　4.2cm
〃	89	外面はナデ・内面はハケ状具調整	外面はナデ（指頭押圧痕残る）・内面はハケ状具調整	粗粒砂かなり目立つ・灰味黄茶褐色・良	口　径　8.4cm 器　高　3.9cm
〃	90	外面はナデ・内面はハケ状具（荒く深みあり）調整	外面はナデ・内面はハケ状具調整（外面で指頭圧痕と継ぎ目痕残る）	細砂粒少量混入・灰味黄茶褐色・良	口　径　9.0cm 器　高　4.2cm
〃	91	〃	〃	粗粒砂少量含む・灰味黄茶褐色・良	口　径　9.3cm 器　高　4.1cm
〃	92	〃	外面はナデ・内面はハケ状具調整（外面に継ぎ目痕）	砂粒を多量に含む・淡橙褐色・良	口　径　9.8cm 器　高　3.8cm
〃	93	外面はナデ・内面はハケ状具後のナデと思われる	内外面ともハケ状具調整（外面は摩耗して一部に観察）	粗粒砂少量混入・淡橙褐色・良	口　径　9.4cm 器　高　3.8cm
〃	94	内外面ともナデ調整（指頭押圧の痕跡残す）	内外面ともナデ調整（指頭押圧の痕跡残す）	砂粒多量に含む・淡黄茶褐色・良	口　径　8.8cm 器　高　3.0cm
〃	95	内外面ともナデ調整	外面はナデ・内面はハケ状具調整（指頭押圧痕あり）	砂粒やや多く含む・灰味黄茶褐色・良	口径約11.2cm？ 器高 約5.3cm？
〃	96	内外面ともナデ？（表面摩耗して不詳）	外面はナデ？・中面体中位ではハケ状具・下位～府面にかけてナデ（接合痕顕著）	細砂～粗粒砂多量に含む・黄茶褐色・良	口　径　11.2cm 器　高　6.5cm
〃	97	外面はナデ・内面はハケ状具による調整	外面はナデ・内面はハケ状具（外面に継ぎ目痕残る）	砂粒少量混入・乳灰色・良	口径　12.2cm？ 器高　4.0cm？
埦形土器	98	内外面ともナデ調整	内外面ともナデ調整	砂粒少量含む・淡橙褐色・良	口　径　11.8cm
〃	99	表面摩耗しているが外面はヘラ磨きと思われる	外面はヘラ磨き・内面はナデ？（不詳）	砂粒多量に含む・灰味黄茶褐色・良	口　径　11.5cm 器　高　6.5cm
〃	100	内外面とも口唇部はナデで以下にハケ状具調整がある	外面はハケ・内面はナデ（ハケ後のナデ？）で底面部ちかくではハケ状痕がある	細砂粒を少量含む・淡橙褐色・良	口　径　14.3cm 器　高　6.6cm?
〃	101	内外面ともナデ調整か	内外面ともナデ調整か（外面体部に赤彩痕あり）	砂粒をほとんど含まず・灰味黄茶褐色・良	口　径　14.8cm 器　高　4.1cm
〃	102	口唇部内外面ともナデ調整	体部は摩耗して不詳	砂粒ほとんど含まず・乳灰茶褐色・普通	口　径　13.4cm 器　高　4.3cm
〃	103	口唇部内外面はナデ調整	表面摩耗して不詳だが、外面にハケ状具痕がかすかに認められる	細砂粒を多量に含む・淡橙褐色・普通	口　径　12.8cm 器　高　4.4cm

第3群土器（第9図10～16）

1は強く屈曲させた口縁部をもつ中型タイプの甕で、外面の叩き目は比較的細くシャープである。2は水挽き成形されたとみられる痕跡を内面で顕著に留める小型壺で、外面肩部～体上部では5条1単位の鋭い櫛歯状具によって2段の波状文（下段では3条が明瞭）をめぐらしている。

3～7は擂鉢とみられるもので、口唇端部のナデによって外唇部・口縁端部がやや肥厚気味となる角ばったタイプ（3～5）と、主に外面の先端基部の強いナデによって外唇部・口縁端部をふっくらとした円みをもたせたタイプ（6～7）とがある。5・6については卸し目の有無は不



第9図　第3群土器実測図（$\frac{1}{3}$）

明だが、4では7条1単位（基本単位として）毎に引刻しているのに対し、4・7では7条ないし8条を1単位とする櫛歯状具で一部重複させて15条程の幅広い卸し目として配置させている。胎中には粗粒砂を少量含むが全般的に良好であり、色調は1•2•3が青灰色～灰色であるのに対し、4～7はやや黄味を帯びる灰色であって焼上りも並ないしやや甘さも感じられる。

所属年代については、Ⅰ～Ⅴ段階区分される珠洲陶の編年[10]観によって、3の小型壺は13世紀後半に想定されている第Ⅲ段階の馬緤窯期•7の擂鉢は第Ⅳ段階の大畠窯期の前半代（14世紀前半）に概ね位置付けされるが、その他の珠洲陶片についても該期中に含まれると考える。

中型タイプの甕では、細かな叩き目と長めの口縁部の造りでは第Ⅱ段階（法住寺3号窯期）とすることも可能視できるが、口縁端部の垂下・瘤状化の傾向もあるので、先細りさせる法住寺タイプにみられる第Ⅱ段階に後出し、端頂部のナデ～6・7に至る口縁外面基部の強いナデと端部の円み化、あるいは内面卸し目の伸幅化などは第Ⅳ段階とみられる。

V　まとめにかえて

今回の調査対象地となった地点は、西に七尾西部丘陵・東に徳田丘陵の控える東西間約100mの沖積平地部をもった、徳田丘陵東側裾の緩斜地最先端部にあたっている。調査地点の東側は、現在の県道西街道線が通り、これに接して丘陵斜面を一部カットしたとみられる段状地上に一軒の住宅建物があり、その北側（徳田丘陵の北西向きに小突出した派生部）でも同様として5～6軒の住宅がみられることから、これらの先端部にあたる奥行の狭い眉状緩斜地を占地とした遺跡の一隅にあたるものと想定される。

調査区で発見した最古の遺物群は、縄文時代前期初頭頃～後期初頭頃に位置付けされるが、北陸における古気候・海水準の変化と遺跡についての研究[11]に照らして調査区内でみられる縄文期の様相について若干の補足を行なえば、当該遺物の出土した時期中はちょうど温暖期に相当して現在より約＋5mに海水準が位置するもので、最下部の砂層面はややゆるい傾斜部分にあたっており、当時の0m地に近接した位置からの出土といえる。四柳嘉章氏は甲・小寺遺跡の報文[12]中で、能登半島内浦湾側では地盤沈下の問題もあるので留意する必要がある旨提言されており、この点を考慮して幅をもたせ、約0m～1m前後に考えられる。そして次に、この遺物群が約1mと厚く被覆される草炭層の時期がある。中期末葉頃からの涼令化に伴う海水準の小後退に従って、気温の回復する弥生時代前半期頃に至るまでの派々とした植生の発達と累積が重ねられてきたものとみられる。

なお、草炭層を第7層・7B層として2分しているが、腐植化がややみられるものとあまり進んでいない上部との分割であるが、相対的には全般的に進行の弱いもので、湿原的な状況が長く保持されてきたものと考えられる。

次の始まりは、弥生時代後期末葉頃からとなるが、精査不充分のまま調査を進行させてきたため古墳時代後期（平安初まで含む？）との遺物の個々の関係は明らかにできないままとなったが、第6図23の小型壺は黄白色地山面に接して長方形土抗状跡の肩部に近い位置からの出土であるので、土層図で5B層に対応する溝状跡に先行する可能性も若干残る。また、当該土器群の細分化・能登式製塩土器、粗製の埦形タイプの土器をどのように理解するかなど多々問題点を残し、中世期では農業用水路と思われる溝跡の検出があるが、通称〝シモイチバン〟という地点に含まれることから、用水順路の番称なのかあるいは中世の「番」編成に係わる遺称なのかも含めて、何ら追求しえないものとなったが以上報告として結びたい。

註

1．四柳嘉章『甲・小寺遺跡』　穴水町文化財保護委員会　(1972)
2．橋本澄夫「石川県能登島町佐波縄文遺跡の研究」『石川考古学研究会々誌』第10号　(1966)
3．小島俊彰「北陸における縄文前期末の様相」『信濃』20－4　(1968)
4．　〃　　「北陸の縄文時代中期の編年―戦後の研究史と現状」『大境』　(1974)
5．谷内尾晋司「第二章 第二項 柳田うわの遺跡」『羽咋市史』(1976)
6．田嶋明人「3　須恵器の編年」『法皇山横穴古墳群』　(1971)
7．田辺昭三『須恵器大成』

8．橋本澄夫氏の製塩土器研究『羽咋市史』『志賀町史』『珠洲市史』などに負うた。
9．吉岡康暢「北陸における土師器の編年」『月刊考古学ジャーナル』第6号　(1967)
10．　〃　　「珠洲古窯」『珠洲市史』資料編Ⅰ　(1973)
11．藤　則雄他「5　砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』　(1975)
12．前掲Ⅰに同じ。

図版1

遺跡周辺の航空写真

調査区の東より高井山（古墳群所在）を望む

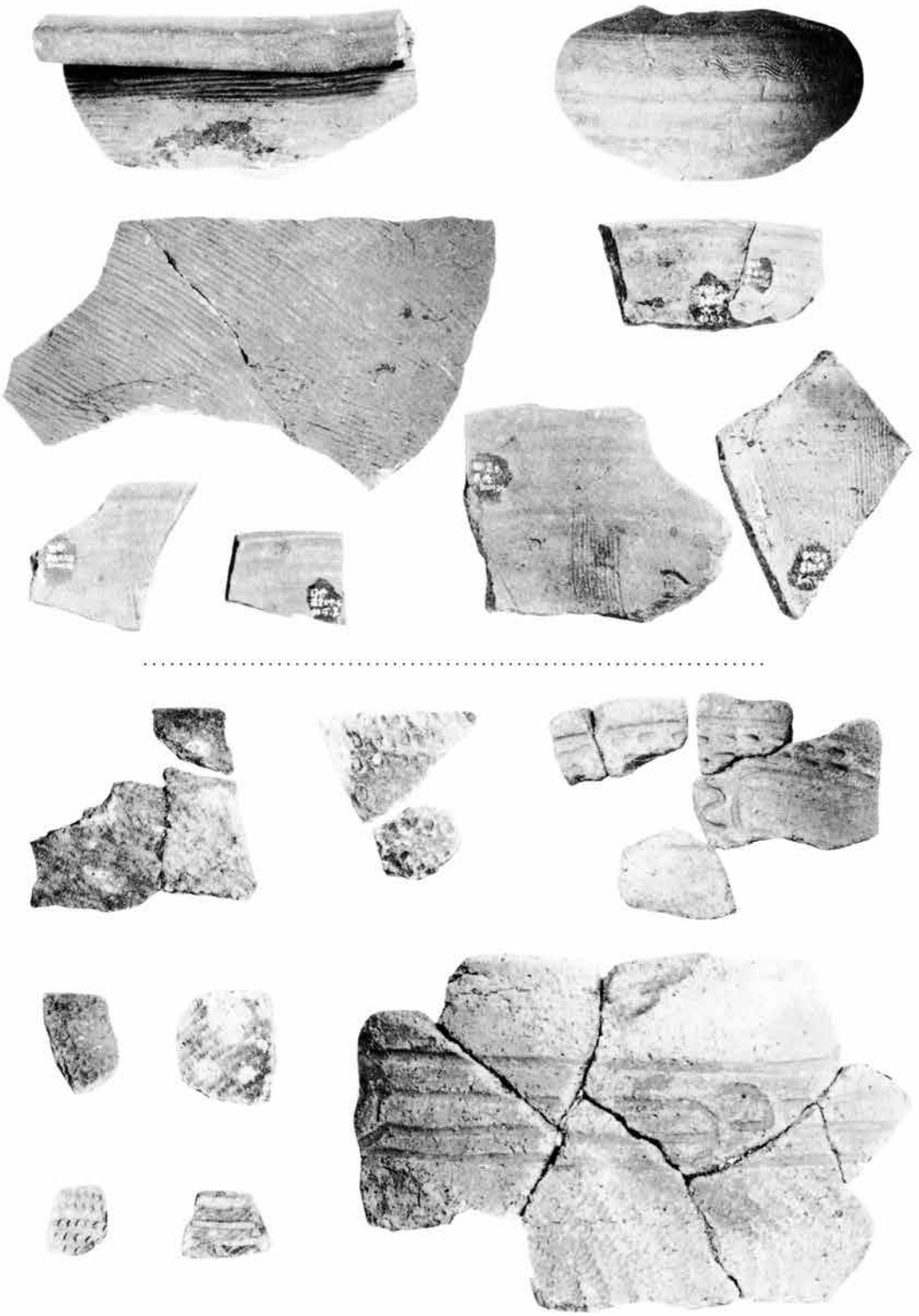
盛土の除去と調査の着手（西側より）

発掘作業風景（南より）

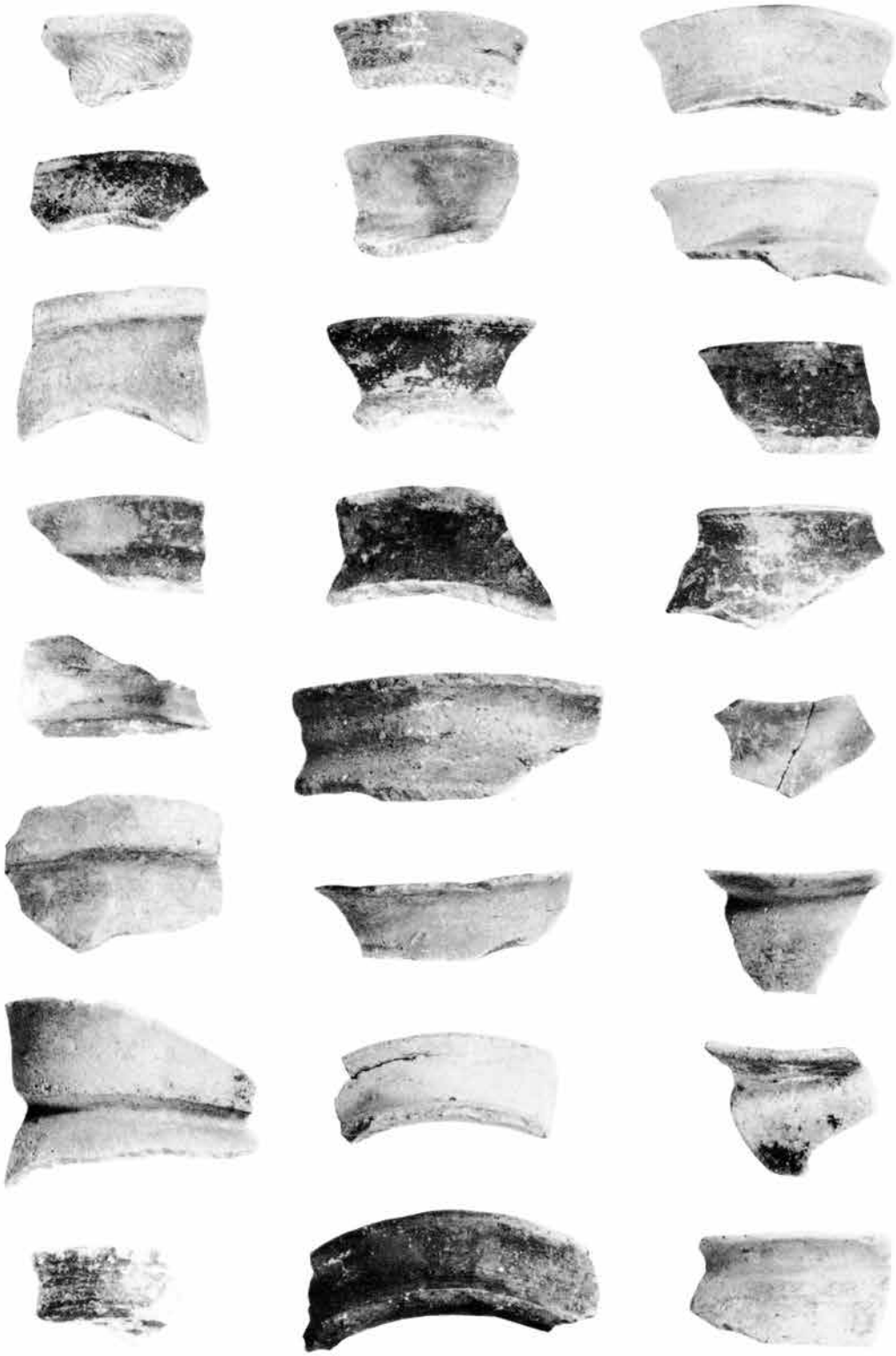
中世溝（中央部）の検出作業

中層部の土器採取と下部草炭層の掘り下げ

砂層面（最下部）の検出状況



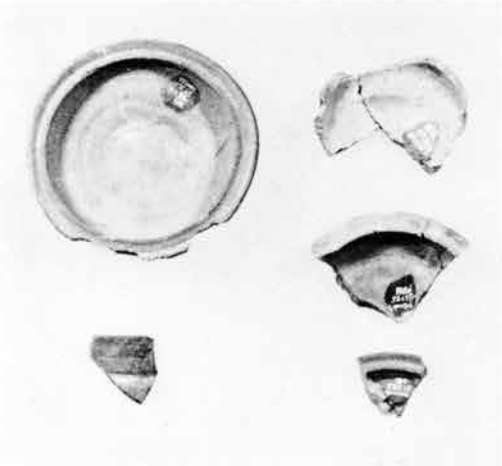
(上)、第3群土器　(下)、第1群土器



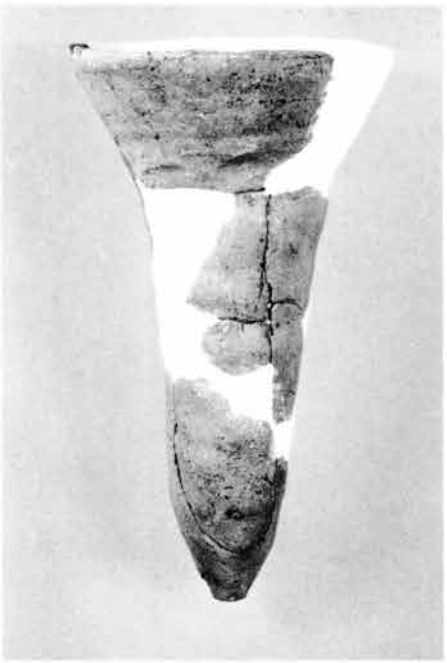
第2群土器

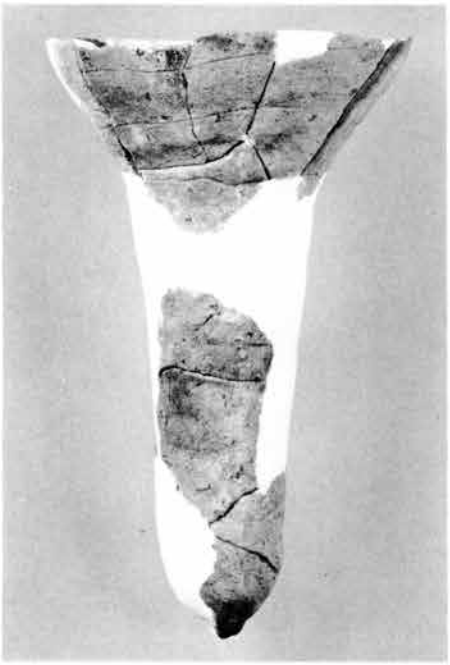
第2群土器

第2群土器

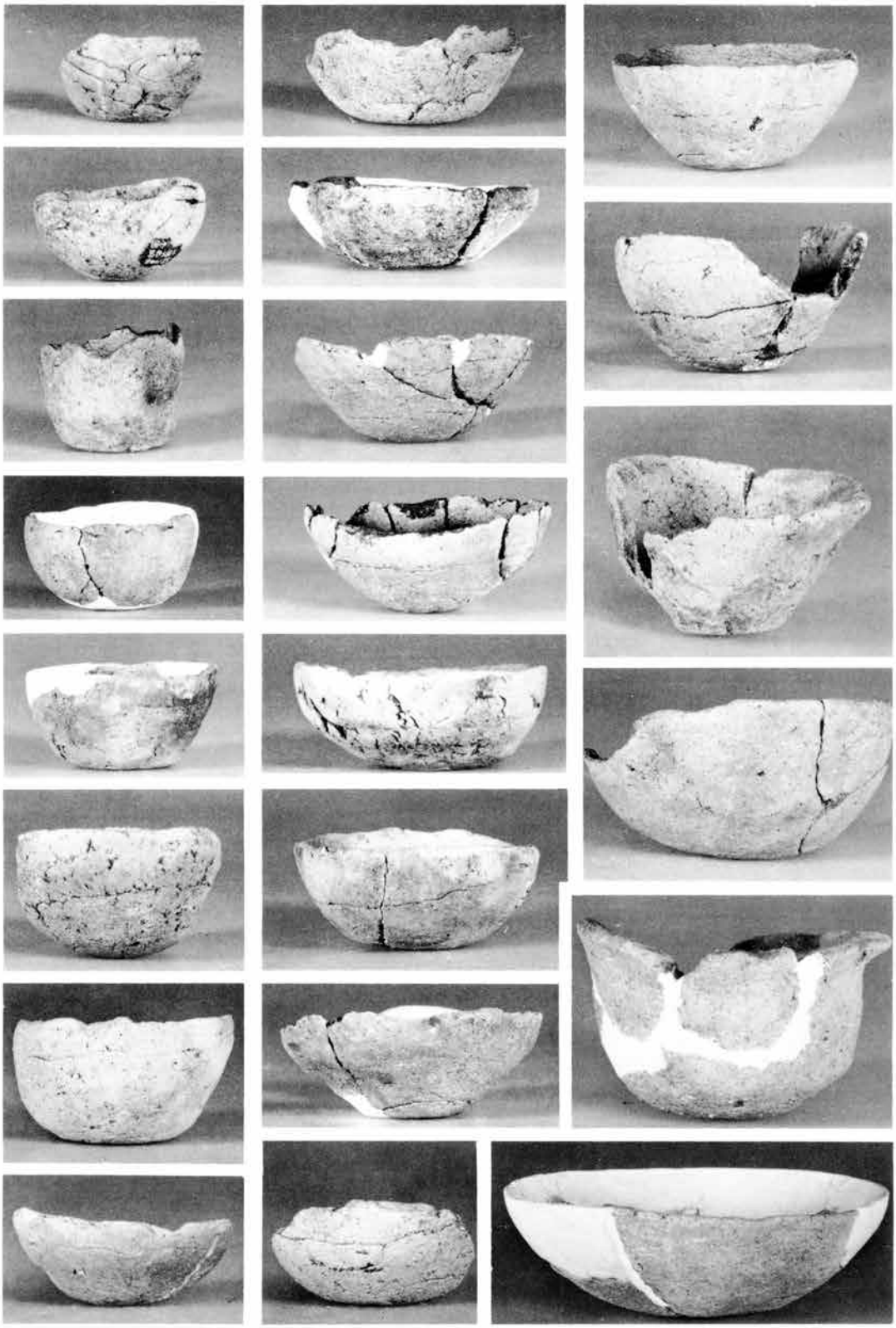


第２群土器

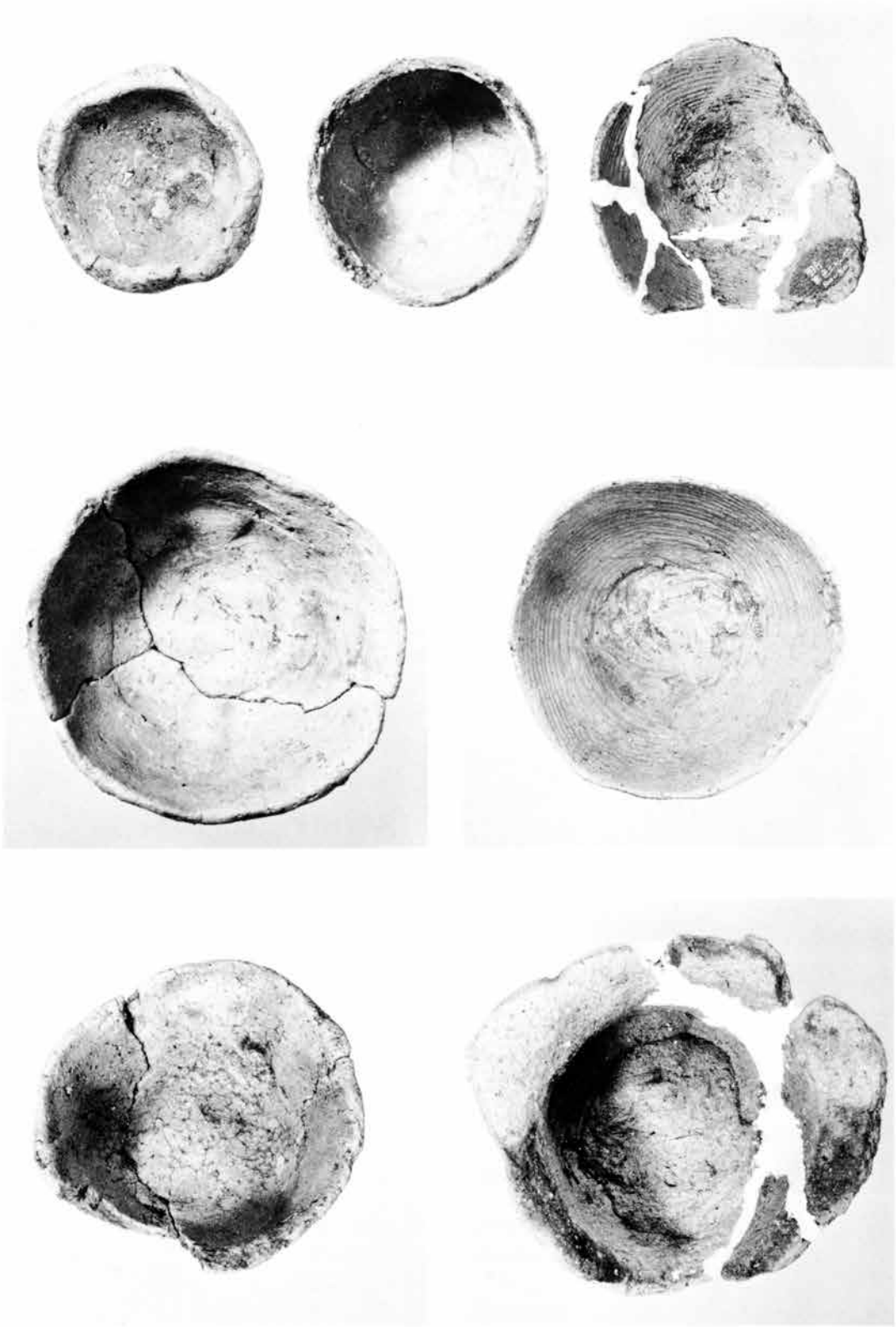




第2群土器



第2群土器



第2群土器